

# GMOコーンの作付けの急増が予想される米国

05年10月、米国穀倉地帯にあるイリノイ州で、日本向けの非遺伝子組み換え（NON-GMO）コーンを収穫している最中の農家を訪問した。「来年には作付けの一部を、根切り虫（ルートワーム）耐性のGMOコーンに転換したい」とその農家は言った。05年に、コーンの根切り虫が大量に発生し、収量は大きく影響され、NON-GMO作付けのプレミアムを上回ったためである。

米国では、97年に本格的なGMO穀物の作付けが始まったが、その導入は最初大豆を中心に、次はコーンに急速に広がった。05年にGMOの作付けは大豆が87%に達し、コーンも52%になった。GMO大豆の作付けは最大限に近づき、今後GMOコーンの作付けも急増していくと見られる。

これまでGMOコーンは、主として中部の穀倉地帯を流れるミシシッピ川の西にあるミネソタ（05年66%）、アイオワ（同60%）、サウスダコタ（同83%）、ネブラスカ（同69%）、カンザス（同63%）、ミズーリ（同55%）の諸州に展開されている。それに対し、ミシシッピ川の東にあるイリノイ（同36%）、インディアナ（同26%）とオハイオ（同18%）では低かったが、今後これら東の州でも導入が急増されると予測されている。

西の諸州ではコーンボアラー（茎などを食べる虫）の発生が多いが、東の諸州では根切り虫が発生しがちである。コーンボアラーに耐性を持つBTコーンは97年にモンサント社によって発売され、その後、西の諸州で導入が広がった。根切り虫耐性のGMOコーンは04年に発売されたばかりであり、東の諸州での導入はこれからだと見られる。また、有名

な除草剤ラウンドアップの値段は安くなっており、農家のラウンドアップレディとうもろこしの作付け意欲も高まっている。

これまでのGMO種子はインプットトレイトと呼ばれ、いずれも生産者の立場に立って開発されたもの。害虫や特定の農薬に対して抵抗性を持ち、生産管理を容易にし、最終的には単収を高めることを目的としている。未来型のGMO種子は、消費者の立場に立って開発された需要対応型であり、アウトプットトレイトと呼ばれている。アレルギーを起こさない機能、糖尿病を予防できる機能などを持つ穀物のように、特定の有用成分を高めたり、消化性を高める成分を導入するもので機能性食品の一種と言える。これらの種子は未だ開発途上にあるが、遠くない将来にリリースされると言われる。

米国から日本に輸出されるコーンのうち25%近くが食品向けであるが、現在、当然そのほとんどがNON-GMOである（ただし、日本向け飼料用コーンは90%以上が不分別）。これは遺伝子組み換えに対する安全性への不安感が大きく作用している。

ともあれそれ以前にGMOコーンの作付けが大豆と同様の水準になったら、NON-GMOコーンの確保がいっそう難しくなり、そのプレミアムもさらに高くなることが予想される。そうした場合、NON-GMOにこだわる日本の食品産業及び飼料産業にどのような影響をもたらすのか。コーンの需要が高度に米国に依存している日本は、こうした変化について早く議論を展開していく必要があるのではないだろうか。

（阮蔚・Ruan Wei）